

序

インディゴ… 藍は古代よりの染料として古い歴史を持っている。およそ4000年以上の間、人々によって育まれてきた藍は、日本だけでなく世界中で愛されている。その藍色の持つ美しさは、全世界にとっても魅力的なのである。インディゴとは英語で、from India という意味であり、その名の示すようにインド周辺にそのルーツがあると思われるが、じっさいのところ定かではなく、一言にインディゴと言ってもその青色を生む材料である植物は世界中に多種存在する。

1492年のコロンブスによるバハマ諸島上陸を皮切りに、北米大陸ではヨーロッパよりの移民が始まる。そして、すでにその大陸で各々の土着文化を築きあげていた北米インディアンたちは、南部からのスペイン軍進出、そして東部からのヨーロッパ人移民によって、自らの生活文化圏より追い立てられていく。

現在多民族国家である北米大陸は、その時期すでにその基盤を作り始めていたのである。それぞれの民族はそれぞれの文化を流入させ、また、他の民族文化と混流することによって新しい支流をつくり、より多様な文化へと発展させていったのである。

北米大陸におけるインディゴに関わる文化と歴史を追うとき、それぞれの民族とその文化がどのようにインディゴを受けとめ、その文化の中に位置づけたかを知るのには必然であり意義深い。またその多民族性のため、より多角的な視野を持ってそのダイナミックスを把握する必要がある。

インディゴの北米上陸・メキシコルート

インカ帝国を征服したスペイン軍が、1540年フランシスコ・バスケス・デ・コロナド将軍に率いられ、メキシコを経て北米大陸南西部（現在の北米、ニューメキシコ州）に進出してきた。そのときすでにその地において確立した文化を築いていた北アメリカ南西部のインディアンたち（主としてプエブロ族、ナバホ族等）は、ヨーロッパ風に発達された文化・知識を持つスペイン軍によってその後何度かの抵抗の後、征服されてしまう。¹⁾

このメキシコ地域よりのスペイン軍の進出は、中米大陸と北米大陸南西部間の文化の交流と流通を活性化させたという見地において、大きな意味を持っている。そのスペイン軍が新たに北米南西部にもたらしたものの

は、馬、羊、足踏み式手織機などが含まれていた。スペイン軍進出以前に北米インディアンたちによって営まれてきた文化には当然のごとく染織技術も含まれ、自然要因を必然なる要素として生活文化の中核としてきた北米インディアンたちは、高度な技術により草木を用いて篋を編み、木綿を紡ぎ染織を行ってきていた。現存する当時の染織品のいくつかにはインディゴで染めたものであろうと思われるものもあり、それによって我々はすでに北米インディアンたちがインディゴによる染織の技術知識を得ていたことを推測できるのであるが、その事実が明らかとなるのはスペイン軍の進出後である。²⁾

スペイン軍による馬の導入は戦いの武器として北米インディアンたちを圧倒しただけでなく、文化・流通の速度と量の増加に大きな意味を持っていた。それまで徒歩によって行われてきた流通は、馬に率いられた荷車によって、より多くのものがより速く伝達されるようになり、その中にインディゴがあったとしても全く不思議ではない。同じく1540年にスペイン軍によって導入された羊5000頭は、その羊毛の優れた保温性、耐水性、また、優れた家畜として、移動の可能な所有財産として、あっと言う間に北米インディアンの生活文化に浸透し、土着の木綿染織文化を圧倒してしまったのである。³⁾ そして今まで木綿に染められてきたインディゴは、羊毛にと染められていくようになり、インディゴはその青色の尊さにおいて高価なトレード品目として当時の通商書類にも記帳されている。⁴⁾

自然崇拜の強い文化を持つ北米インディアンたちにとっては染織も全く例外ではなく、その視覚的デザインはもとより、一つ一つの染織過程にも彼らの持つ世界観を見いだすことができる。特にインディゴによる染織はいろいろな観点より彼らには特別な意味を持っている。まずインディゴが青という色を染めると言うことがあげられよう。彼らにとって青は、彼らの世界観において絶大なる存在である父なる空の色であり、ブルーバードに象徴される幸福さらには地の豊穡を意味し、宝とするトルコ石の色なのである。北東アリゾナを中心として存在するホピ族では saqwa という言葉をつくってその美しさを讃えているほどである。

次に、インディゴの染織過程が他の天然染料のものとは特出して異なっているということである。世界各地にはいろいろなインディゴの染色法が伝わっているが、共

* NAMBA Kumiko 工芸工業デザイン学科

通しているもっともプリミティブな染色法の一つとして人間の尿を用いたものがある。

北米インディアンたちの間では、幼少児の尿を村のはずれにおいた土器の瓶にためておき、発酵されたその尿をインディゴを染めるときの助剤として用いるのである。インディゴ $C_{16}H_{10}N_2O_2$ はそれ自体水溶性ではなく、還元剤によってリユコ・インディゴ $C_{16}H_{12}N_2O_2$ という水溶性のものとなり、更にアルカリ剤によってそれが水溶され初めて染織可能となる。そして大気による酸化の後、被染物は青色にと染まり上がるのである。還元前のインディゴ染液は濃紺色をしているが、還元度が進むにつれその液は黄色に近いものとなり、その染色液より引き上げられた被染物は、大気の酸素に触れることにより酸化され瞬間において黄より青へと変化するのである。この発色の瞬時の変化はインディゴ染織特有のものであり、人間を越えた不思議な力が何らかの形でその場に関与している印象を誰にでも与えるだけの説得力を持ち合わせる。発酵した尿はこの場合、還元剤とアルカリ剤の両方の役割を果たし、インディゴ染織の過程において必要不可欠である。⁵⁾しかし、ある北米インディアンの部族では、この尿を用いるという特性の故に、太陽神に捧げる儀式に用いる布や死者を埋葬するための布には、神への冒とくという見識により、インディゴで染めてあるものは使用できないとされた。

そして、インディゴの青が、緑を、紫を、また、黒に近い色⁶⁾を染める上で必要であったという事実である。彼らが多用していた天然染料は、彼らの生活に身近にある草木類が主体であり、また、天然染色法に必要な媒染剤（ピグメントを繊維に固着させる金属塩）は、明礬質の岩から採集されるアルミ塩であったため、それらより得られる色相としては黄、褐色、茶が主体である。緑、紫、黒、そして青自体は、インディゴを使用することによって可能なのであった。

北米南東部・もう一つのルート

今一度正確に言うならば、インディゴは青色を染める植物染料のピグメントの名であり、インディゴを有する植物は300種以上知られている。中米で育っていたインディゴは *Indigofera Suffruticosa* / *Indigofera Anil* であり、日本本州に生ずるもの *Poligonum Tinctorium*、インドに生ずるもの *Indigofera Tinctorium*、また西アフリカのもの *Lonchocarpus Cyanescens* とは異なる。1770年頃には、北米東部には *Indigofera Suffruticosa* / *Indigofera Anil* とは別種のもので広がっていた。北米南西部のインディゴが、メキシコ地域よりの北上ルートを経たのに対して、現在のルイジアナ州、南・

北キャロライナ州にあたる地域では、政治的・経済的意図をもって西インド諸島よりヨーロッパ人によって持ち込まれ、広大な畑に作物として植えられていたのである。その当時、世界においてインディゴはもっとも利潤の高いトレード品目の一つであり、スパイス・シルク・コットンそしてインディゴを積んだ東インド各会社の船舶が世界の海を行き来し、その富を築く糧としていたのである。オランダやポルトガルの商人が、インドよりのインディゴの売買を通して多大の利益を得ていた事実は、他の国々のインディゴ生産への興味を煽り、スペインをしてグアテマラに、追ってフランスがカリブ海の植民地に、インディゴ生産の基地を造らしめた。

そして英国は、インドや西インド諸島と同様に、当時植民地としていた北米でも、インディゴ生産することを奨励したのである。当初、北米南東部に入植していた移民は *Indigofera Suffruticosa*、*Indigofera Tinctorium*、さらには現地の野生種 *Baptisia Tinctorium* の育成を試みたがインディゴ育成とその染料生産の知識と経験⁷⁾に欠けたため失敗に終わった。しかし、17歳より家族のプランテーションを任されていたエリーサ・ルカス（カリブ海のアンティグア島を統治していた英国人の娘として生まれる。後に結婚後、ピンクニーと改名。）の根気強い試行錯誤の後、彼女の父親によって西インド諸島より持ち込まれたインディゴ種が南キャロライナ地方での育成に適していることを実証し、1744年には、6ポンドのインディゴ・ピグメントをロンドンに送り、アメリカ南東部におけるインディゴ育成の基礎を築いたのであった。1775年には、年間100万ポンド以上の産出を記録するほどまでに北米南東部におけるインディゴ生産は成長している。しかし、1861年から65年にわたったアメリカ南北戦争は、それらの広大なインディゴ畑を全くの廃虚にしてしまい、戦後、需要や利潤の高いコットン、タバコ、米の育成へと変換させてしまう。かつて隆盛を極めたそのインディゴ種は、現在、北米南東部に野生種となりわずかに点在するのみである。

アメリカ南東部の広大な畑で育ったインディゴが、南西部にわたった可能性も否定できないが、その背景となる市場・文化圏はヨーロッパ人中心のものであり、土着文化をもつ北米インディアンたちとの接点は少なかったとみるのがふさわしい。それに対して、スペイン軍の北上は、北米インディアン各部族とスペイン人の混血をはじめとするそれぞれの文化の混合を生み、北上ルートを経たインディゴが北米南西部で多用されたとみるのが自然であると思われる。北米南西部で使用されていたインディゴや西インド諸島より持ち込まれ北米南東部で育てられていたインディゴのトレードルートや詳しい品種を

更に探ることは研究上必然のことであるが、今後の調査研究に委ねることとする。

変遷期

1821年、サンタフェ・トレイルが、ミズーリ州、フランクリン（現在のインディペンデンス）からニューメキシコ州、サンタフェ間で開通し、幌馬車によって北米中部部と南西部が結ばれる。そしてヨーロッパ出身のアメリカ人により、北米インディアンたちのテキスタイル、特にナバホ族のものは、商品価値を見いだされ、アメリカ東部にその市場を開拓する。⁸⁾ また1882年には、アトランティック・パシフィック鉄道の開通により北米西海岸地域にもその市場を広げる。それまで自らの生活と儀式のために創り出されてきた北米インディアンたちによるテキスタイルは、この時期大きな変化とピークを迎える。

それ以前のデザインは、ストライプを中心とする単純明快なもの为主体であり、色彩も羊毛の自然色をふんだんに用い、大胆なインディゴストライプの入ったチーフブランケットに代表されるように、彼らの文化の中でインディゴはとても重要なものとして扱われていた。しかし商品となったテキスタイルは、市場である白人文化の志向を反映し、より複雑なデザインを次々に産みだす一方、手間のかかる手織り仕事には変わらないながらも、彼らが商品・量産志向を否定することは難しかった。鉄道や流通路の開発は、北米インディアンたちにそのテキスタイルの市場とともに、機械紡績の糸や化学染料で均一に染められた毛糸⁹⁾を与えたのであった。そしてインディゴはもとより他の天然染料は使用されなくなり始めたのである。

1880年、ドイツの化学者アドルフ・ボン・バイヤーが人工的にインディゴをタールより抽出することに成功し、1890年頃には、その染色法と入手方法の簡易さにおいてあつと言う間に世界中に広がっていった。それに反比例して、元来のインディゴの育成から染織にいたるまでの技術と文化は世界中の至る所で消失していく。北米南西部のインディアン部族間にも時期を同じくしてそのシンセティックインディゴ（化学藍）は紹介されるが、彼らの自然崇拜を主幹とする生活文化は外部よりの急激な変化を拒み続けたために、それでも1920年頃までは天然のインディゴによる染織は少数派となりながらも存在し続けたのである。

リバイバル

1980年代頃に始まる北米インディアン文化やヒスパニック文化¹⁰⁾の見直しをはかる流れは当然のごとくインディゴの再発見へとも導くが、一度とぎれた文化の糸をもと

どおりに繋ぐことはなかなか難しく、現代においては、嘗てのような力強いインディゴテキスタイルに巡り会えることは稀である。

しかし過去に染められたインディゴブルーは寡黙を保ちつつも、その美しい濃淡なる青は時代を超えた重厚さを放ち、人々の心を捉える。インディゴや他の天然染料を用いてのテキスタイル制作により、その背景となる文化と歴史を再認識しようとする人々が、徐々にではあるが増えてゆき作家という形で確立し始めている。彼らが文化の旗手となり次のインディゴのページを染めてゆくことに心より期待を寄せたい。

註

1) 1540年、フランシスコ・バスケス・デ・コロナドが北米南西部を探検する。

1598年、ニューメキシコ地域の植民地化が、ファン・デ・オニャテによりなされる。

1610年、サンタ・フェが、植民地の首都として、統治者ペドロ・デ・ベラルタによって選定される。

1680年、サンタ・フェにおけるプエブロインディアン部族による反乱が始まる。

1696年、ディエゴ・デ・バルガス将軍により、プエブロインディアン部族による抵抗が鎮圧される。

2) 本来その染織の特質上、インディゴは木綿をはじめとするセルロース繊維の染織に秀でている。しかし、北米インディアン文化で木綿が主要繊維であった時期のインディゴ染織遺留品は、稀少であり、退色度もかなり進んでいる。このことから、適切なインディゴ染色法は、その時期まだ彼らには知られていなかったとみるのがふさわしいのではないか。これに対して、スペイン軍の進出後に生じたインディゴテキスタイルは、その素材である羊毛とインディゴが相性が良いものはいえないながらも、その退色度が稀少であることより、それらが適切な方法によって染織されたことが推測される。

3) 1540年に初めてヨーロッパ大陸より持ち込まれた羊は、Churroというスペイン南部原種のもので、北米南西部の乾燥した、岩質の高地に適しているものであった。

その羊毛の特質は、ラノリンという脂質が低く、またスケールという鱗状の構造質があまり発達していない。そのため手紡ぎ前に、水洗して汚れや過度の脂質を取り除くという行程をほとんど必要としない。このことは、高原砂漠地である北米南西部のインディゴ染色において長所として働く。一般に、インディゴ染色はアルカリを必要とし、羊毛を染色する場合、酸には強くアルカリには弱いという羊毛の性質のために、その羊毛繊維表面のスケー

ルに負担を与え、染め上がった羊毛繊維は痛んでしまう。また、水洗・湯洗不足による羊毛の過度の脂質は、染着の悪さや、むら染めの原因ともなる。

1859年、ニューメキシコ東北部にメリノ種(ランブイエ交種)が頭当たりのより多い羊毛収穫量を目的に導入され、1890年代には、純血のチュロ種は稀となってしまふ。メリノ種の羊毛は、チュロ種のものとは異なり、それ自体大変柔らかくかつ大変繊細な毛糸が紡げるのであるが、高ラノリン・密度の高いスケールというインディゴ染色においては相性の悪い条件に溢れていた。

このメリノ種の導入時期は、化学染料の開発、機械紡績、流通路の開拓、カタログ販売まで生んだインディアンテキスタイルの購買層の台頭等とほぼ時代を共有する。さらに、過度の羊遊牧による土壌の砂漠化、干ばつ、世界大恐慌の走りとなる米国東部の経済危機が生んだ羊毛市場の急落などと相い交ざって、北米南西部のインディゴ染織は、その手間暇のかかる過程とその特異性、そして染料の高価さにおいて、だんだんと稀なものになっていった。

4) 1854年、ニューメキシコ、アルバカーキーで48ポンドのインディゴがポンド当たり1ドル10セントで売買されている。ちなみにコーヒー、砂糖、ナツメグがそれぞれポンド当たり10セント、6セント、1ドル40セント、そして火打ち式ライフル一丁4ドルと記帳されている。

5) 日本では今日、化学薬品を用いるインディゴ染法としてハイドロサルファイトを還元剤に、苛性ソーダをアルカリ剤に使用するものがあるが、古来よりの染法としては、木灰・石灰等をアルカリ剤に、水飴、砂糖、酒、等をインディゴを発酵還元させるために用いる。

6) 天然染料には、単種で純黒を染めるものはほとんどなく、天然の黒羊毛(実際は濃い焦げ茶色をしている)を更にインディゴで染めることによって、できるだけ黒に近いものを得ていた。

7) 一般の天然染料は、それ自体を煮沸し染液とする。これに対してインディゴは、そのピグメント抽出のためには、葉部を微生物によって腐敗分解させるプロセス(日本では、すくも造り、英語ではcompostingという)を踏まなければ基本的には染色できない。これは、インディゴ染色の特異性の一つであり、その過程が有機化学の力によるものであっても、それを人間の技術と感性によって微妙にコントロールすることで、その染料としての出来が決定づけられるという重要なプロセスである。

8) 1896年-1911年、ナバホ・ブランケットのカタログ販売が北米東海岸で行われた。

9) アニリン染料という化学染料で色鮮やかに染められた、三つ縫りから四つ縫りとして機械で紡がれた毛糸を総称的に、その生産地がジャーマンタウン(現在に当たる北米フィラデルフィアの一部)であったことより、ジャーマンタウンヤーンと呼ぶ。その使用は、1870年より1890年に最盛期を迎える。

10) ヨーロッパ大陸のスペイン文化とは源を等しくしながらも、現代アメリカ文化においては、スペイン系アメリカ文化をヒスパニック文化と呼ぶ。現在北米南西部では、北米インディアンやヨーロッパ系アメリカ人との混血がかなり進んでおり、又、スペイン軍が南米・中米そして北米へとヨーロッパ大陸より進出してきた過程事実をふまえ、そのアイデンティティーを探索することが、ヒスパニック文化の再認識につながっているともいえる。

参考文献

Rita J. Adrosko, *Natural Dyes and Home Dyeing*, Dover, USA

L.H. Bailey, *The Standard Cyclopedic of Horticulture*, USA

Rita Buchanan, *A Weaver's Garden*, Interweave Press, USA

Mary-Russell Colton, *Hopi Dyes*, Museum of Northern Arizona Press, USA

Nora Fishier, *Spanish Textile Tradition of New Mexico and Colorado* Museum of International Folk Art, USA

Kate Peck Kent, *Navajo Weaving*, School of American Research, USA
Prehistoric Textiles of the Southwest, SAR, USA

Gladys Reichard, *Navajo Shepherd and Weaver*, Rio Grande Press, USA

Gosta Sandberg, *Indigo Textiles*, A&C Black Ltd, U. K.

Jun & Noriko Tomita, *Japanese Ikat Weaving*, U. K.

Leland C. Wyman, *Southwest Indian Drypainting*, SAR, USA

Textile and Culture
Indigo and its culture in the southwestern United States
Kumiko Namba

Indigo has been one of the most important dye-stuffs throughout the world for over four thousand years.

The southwestern part of the United States has kept the tradition of indigo-dyeing in textile art, from the Spanish heritage as well as from the North American Indians'.

Though its original importance to native cultures is no longer strongly evident, we can still observe its historic/ symbolic importance through the few remaining examples of indigo textiles.

The multi-racial character of the United States has brought many diverse backgrounds and methods to the development of the various indigo cultures throughout the land.

The soaring European empires which launched the colonization in the New World during the Era of New Discovery, and the northbound Spaniards from Central America in late 1500's, created the two main trade routes of indigo into North America. Because it was a valuable trade item, indigo was often used as a political and financial instrument; and with the spread of New Spain into what is the present southwestern United States this dye material became widely distributed throughout the region.

The period of modernization that followed brought with it such wonders as synthetic dyes from coal-tar, and railroads supplying a mass market for the new rich, etc.. As a result of these and other transformations, the tradition and culture of indigo began to fade from contemporary life. Still, many shades of indigo in the old textiles attract us with their rich and beautifully dyed blues, giving inspiration to a new generation to create a new phase of indigo history.

(1994年10月3日受理)